

日本教育大学院大学監修
高橋 誠編著

『教師のための「教育メソッド」入門』

齊藤 誠

1. 本書の問題意識について

日本では今、経済問題と共に教育問題が最も重要な課題として論議されている。特に OECD が実施した PISA 国際比較調査で、日本が先進国の中で低順位になったことで日本の教育に対する疑念が大きく叫ばれるようになった。このような事態は、教育国を自負してきた日本にとって見過ごすことは出来ないといえる。

教育問題は大きくは、GDP に対する教育費が OECD 諸国平均では 5%なのに日本はわずかに 3.5%といった国家的な問題から、いじめが頻発する教育現場の問題まで多岐にわたる。

本書は其中で、日本の教育の仕方と教師の教育技法に問題提起したものとイえる。教育の仕方に関して、編者は教師に必須の能力は「人間力・社会力・教育力」の3力という。そして、このうち「人間力」は教育技法で育成するのは困難だが、「社会力」と「教育力」は教育技法により改善が可能と指摘する。そのため、教師に「教育メソッド」を身につけることを薦め、本書を企画したという。

確かに日本の教育現場はまだまだ講義中心の教え込み方の教育スタイルが主流であり、演習などを主体とした生徒参加型の教育ではない。また世界の教育現場では ICT を駆使した教育が続々と導入されているのに、日本は大変遅れている。編者が指摘する日本の教育現場での問題は確かに深刻であり、教師力の向上は必須であり、その意味で、本書は教育現場に対する警告の書とも言える。

2. 教育技法を 30 種紹介の概要

本書では 5 分野の 30 技法を紹介している。5 分野は「教授メソッド」「ICT メソッド」「対人メソッド」「相談メソッド」「解決メソッド」で、各技法を専門家 25 人に依頼したのが本書である。

「教授メソッド」は教え方の技法で、中には「フィンランド・メソッド」「論理思考法」「授業プレゼンテーション法」「創育発問メソッド」「思考深化板書法」「文章作成法(アウトラインチャート)」「BRD 法(当日ブリーフレポート)」「ポートフォリオ評価法」など 8 技法が紹介されている。教

師が従来の教授法を見直すのには有効な技法といえる。話題のフィンランドメソッドや、産業界で注目の「論理思考法」なども紹介されており、教師がこれら新技法の概要をつかむのには役立つと思う。

「ICTメソッド」はICTを活用した教育技法である。続々と進化しているICTメソッドの一端を垣間見ることが出来る。「ICTプレゼンテーション作成法」「授業デザイン技法」「インターネット活用法」「ICT授業評価システム」の4技法が取り上げられている。最近注目されているインストラクショナル・デザイン技法は「授業デザイン技法」として、また授業に生かせる「インターネット活用法」も紹介されている。授業をパソコンや携帯電話などを用いて評価する「ICT授業評価システム」など最新の技法もある。

「対人メソッド」は教師の対人コミュニケーション能力向上の技法である。教師同士の対話、教師と生徒・保護者との対話、生徒同士の対話などに活用できる。「積極的傾聴法」「アサーション法」「協同学習法」「教育ディベート法」「教育アクションラーニング」「教育コーチング」「ソーシャル・スキルデベロップメント」の7技法が紹介されている。「積極的傾聴法」と「アサーション法」という対話の基本技法、「教育アクションラーニング」や「教育コーチング」という産業界から教育界でも幅広く展開されてきた技法、そして生徒同士が学びあう「協同学習法」などは注目すべき技法である。

「相談メソッド」は、教師の生徒や保護者などに対するカウンセリング技法である。「相談面接法」「交流分析法」「観察アセスメント法」「教育リラクセーション（呼吸法）」「キャリア・カウンセリング法」の5技法がある。教師はカウンセリング能力を養成することが欠かせないが「相談面接法」「交流分析法」などはその基本的な技法である。また「キャリア・カウンセリング」は近年、文科省が強力に推進を図っている、生徒に自分の将来の生き方、職業観などを育成する技法である。

「解決メソッド」は問題解決のための技法である。中には、「カード・ブレインライティング法」「サウンド・ブレインストーミング法」「ブロック法」「ストーリー法」「参画ラベルトーク技法」「CPSI法」の6技法が取り上げられている。「ブレインストーミング法」「ブレインライティング法」は問題解決の発想の技法、「ブロック法」や『ストーリー法』は発想したものをまとめる技法である。これらはホームルームやクラブなど特別活動で討議に使えるばかりでなく、各教科でのさまざまな演習で活用できる。

本書は、幅広く教育技法を取り上げ、それらのポイントの基本は押さえているといえる。

3. 本書の、今後の課題とは

本書では「教育メソッド」を幅広く取り上げて入る。しかし各技法を紹介するページは6ページ程度である。詳しくは参考文献ということであろう。つまり本書が技法紹介のカタログブックであることは否めない。ぜひ主要な技法を単独で紹介するために教育メソッドシリーズの刊行を期待

したい。

また新しい教育メソッドは続々登場してきている。本書で取り上げられなかった新しい技法も今後、引き続き取り上げてほしい。特に ICT 関連の技法は大きく進化しているので、ぜひこれらの紹介も進めてほしい。

日本教育大学院大学は、日本初の教員養成の大学院で、教育メソッドの研究は最も重要な研究テーマとの記載もある。大学院の使命として、本書の続編を期待する。

ともあれ、小・中・高・大など教育機関の教師、教師志望者が自らの教師としての資質を高めるためにも教育メソッドの習得は欠かせない。現場の教師が気軽に教育メソッドを学ぶ入門ブックとしての使命の一端を本書は果たしているとは言える。

(教育評論社刊、2008年9月27日発行、A5版、223頁、本体価格1500円)